



7月号 この時期注意が必要な病害について

こんにちは、高南農業改良普及所です。急激に気温が上がり、病害が発生しやすい時期となりました。今回は、この時期から発生が増えてくる病害と対策についてお知らせします。

① 白星病 *Phyllosticta zingiberis*

糸状菌による病害で、発生初期は葉上に**灰白色の小斑点**を多数生じ、進行すると病斑同士が融合して**縦長の不整形病斑**となり、さらに進行すると**葉が枯死**します。乾燥しやすいほ場や、肥料切れの状態が発生しやすいとされているので生育が旺盛になるような肥培管理を心がけましょう。また、多発しからの防除は困難ですので、発生初期からの防除を徹底しましょう。

<対策>

- ・乾燥や肥切れを起こさないようにする
- ・雨によって飛散し、風によって運ばれるので、降雨前に防除を行う
- ・感染源とされる自生ミョウガがほ場周りにある場合は、処分しておく

<主な登録薬剤>

- ・ダコニール1000
 - ・トリフミン水和剤
 - ・アフエットフロアブル など
- ※防除の際は登録内容(散布方法、希釈倍率)などをよく確認したうえで実施してください



② 赤枯病 *Candidatus Phytoplasma asteris*

ヨコバイ等により媒介される**ファイトプラズマ**による病害で、**葉の縁から黄化して地上部が色抜けする症状**を呈し、最終的には**枯死**します。また、**茎の生長点が軟化したり、種塊茎や一次塊茎に浅いしわが見られる**こともあります。7月中旬～10月にかけて発生し、虫による媒介のためわずかに点在する場合はほとんどですが、まれに多発します。ほ場周辺の雑草に生息する媒介虫がファイトプラズマに感染した植物を吸汁して保毒し、ショウガに移動・吸汁することによって発生していると考えられています。

<対策>

- ・発病株は伝染源となるため、発見次第直ちに抜き取り処分する。
- ・生育不良を起こす可能性があるため、発病が疑わしい株は種塊茎に使わない。



③ 青枯病 *Ralstonia solanacearum*

細菌による病害で、最も警戒すべき病害の一つです。発生初期は地上部の下位葉が黄化して萎凋し、その後上位葉にも進行、やがて株全体が萎凋、枯死して倒伏します。茎の地際部は水浸状に軟化し、容易に引き抜けます。塊茎は、表面はごくわずかに水浸状に変色し、内部は黄褐色に変色している場合があります。発病株の茎や塊茎を切断して水を入れた容器などに浸すと、白色の細菌液が糸を引くように流出します。

大雨などでほ場が浸冠水すると水とともに運ばれた病原菌が広範囲に感染し、急激に発病が広がる場合があります。高温条件では発病しやすく、病状の進展も早いですが、低温期に感染すると症状が認められないまま保菌株となり、種塊茎による伝染源となることがあります。

<対策>

- ・種塊茎による伝染を避けるため、種塊茎は厳選する。発病ほ場の塊茎は、外観上健全でも種塊茎として用いない。
- ・ほ場内及び周辺の排水対策を徹底し、浸冠水しないように留意する。
- ・前作で発病したほ場は、植付け前に土壌消毒を行う。
- ・発病株とその周辺株は早急に除去し、ほ場外で適切に処分する。



④ 腐敗病 *Erwinia carotovora* subsp.

*Erwinia*という細菌による病害で、他の作物では「軟腐病」と呼ばれる病害です。根茎腐敗病とは異なります。発生初期は地際葉鞘部が褐色水浸状となり、のちに褐色病斑となります。地上部は萎凋し、最終的には枯死します。塊茎は初め淡褐色、のちに褐色水浸状病斑となり、症状が進むと軟化、悪臭を発するようになり、表皮のみを残して組織が崩壊します。

<対策>

- ・必ず無病の種塊茎を使う
- ・土壌消毒を行う
- ・連作しない
- ・発生が認められた場合は、株を除去し、銅剤を散布する



※**根茎腐敗病の発生が県下全域で増えています。**

引き続き、注意をお願いします。

※非常に暑い日々が続きます。防除やほ場管理の際は、十分な**熱中症対策**を行ったうえで実施して下さい。

※ご質問がある場合、下記までお問い合わせください。

